

## ■ 編集だより

### 編集後記

年齢を重ねると時間が経つのが早いと感じると言いますが、今年は、気候変動のためか秋もほんの少しの時間しかなく、長い暑い夏が終わったと思ったら、急に寒くなってきて、ほんとうにあっという間に1年が過ぎたように思います。気持の方が時間についていけないのが実感です。そして、政治、経済の不安定さは、人のところにも影響してか、わが国の自殺者数は相変わらず高い状況が続いており、中、高校生の自殺や高齢者のいじめのニュース、悲惨な犯罪や戦争が続いて起こってきており、社会の急激な変化に対応できない人が増加してきているように思います。そして、精神科医の役割は益々重要になってきていますが、そのニーズにまだ十分答えられていないのではないかと思います。向精神薬の過量投与や不適切な使用などがマスコミをにぎわせ、精神科医が信用を失うような事件も報道されています。日本うつ病学会、日本臨床精神薬理学会、日本生物学的精神医学会の三学会は精神科医の立場から、今後とも適切な薬物療法を行うとの声明を発表しましたが、本学会はこの声明を発表するタイミングに乗り遅れてしまいました。わが学会員は1万5千人を超えてきましたが、どこにこのような多くの会員は居られるのか、地方では相変わらず精神科医不足が続いており、田舎では精神保健指定医は希少価値のように扱われているのが現状です。おそらく精神科医の考え方もさまざまであり、意見を集約することは困難なことと思われませんが、精神科医に関わる何らかの問題が発生した時には、それぞれの「会員の声」をすぐに反映できるシステムの構築が必要になってきているように思われます。課題によっては、今回の抗うつ薬の過量投与問題のように最も関係している課題と関連を有する学会が対応をすればよいと思われませんが、精神科医の存在に直接関わるような出来事に関しては、本学会が主体的に直ぐに対応できるようなシステムが必要になってきていると思われれます。理事会が2か月に1回しか開催されないということで小回りがきかないということがあるのかも知れませんが、したがって、メールなどをより積極的に活用して議論を深める必要があるようにも思います。事務局の人たちは、膨大な事務量で疲弊されているようにも思います。事務局体制もより充実させる必要があり、今回の学会移転と事務局員の増員に大いに期待したいと思っています。一方、マスコミの偏った情報に惑わされないような対応も必要と思われれます。本人と面接もしないで伝聞だけでコメントをするようなことは避ける必要があると思います。逆にマスコミを味方にするような方策を考えなくてはならないと思います。今後とも精神科医が社会の中で役立つことを示していく必要があるように思います。

中村 純